

陳舜臣

相思
青花

上卷

相思青花

上卷

陳舜臣

講談社

相思青花 上卷



定価 一三〇〇円

第1刷発行 昭和62年2月10日

著者 陳舜臣

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二二二
電話(〇三)九四五―一一一

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

©陳舜臣 一九八七年
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担でお取替えます。

相思青花

上卷

相思青花(上) ● 目次

壺と皿	五
花市場	三〇
沈む碇	四五
ハリルの家	六三
ハーレイ街	九一
往復書翰	一〇八
相思青花	一三二

迷橋図	一五三
姉妹	一七四
聴浪亭	一八九
輝子の秘密	二〇八
赤い枕	二四二
胡蝶蘭	二六〇
暗転のまち	二九二

装幀 武山 忠
イラスト 丸田 初彦

壺と皿

ウィークデーなのに観光客が多い。女性のガイドが、担当しているグループを集めようと、しきりに甲高い声を出している。

人ごみのなかで、奈美はあたりを見まわした。

ヨーロッパからバスで気軽に遊びに行けるアジア。——それがトルコのイスタンブールである。もともとイスタンブール市はボスポラス海峡にまたがった都市で、その西岸はヨーロッパで、東岸がアジアなのだ。

オスマン・トルコ帝国時代、スルタン（回教王）と称した皇帝の宮殿は、このまちのアジア側にあり、トプカプ・サライと呼ばれていた。いまそこは博物館となっている。

奈美はその庭に一人で立っていた。すぐそばにいた老人夫婦のやりとりが、しぜんに彼女の耳にはいる。

——フィルムを売っているところがみつからない。しまったな、これは。……

奈美がふと見ると、老人はそう言つて、胸のポケットの上を軽くたたいていた。

——トルコはアメリカじゃないんですからね。フィルムなんて、ちゃんと用意しておかなきゃ、

ほんとに。

老人の妻の英語には、あきらかなラテン訛なまりがあった。夫のほうのそれは、なんとなくドイツ語的な響きがある。二人とも英語を母語としない地域に生い立ち、さまざまないきさつがあつて、アメリカで結ばれたのであろう。

（誰もがドラマの登場人物だわ。……）

奈美はそうおもつた。

結婚生活十年で夫をうしない、未亡人となつたばかりの奈美は、自分の悲劇にローラーをかけようとしていたのである。

運命に翻弄ほんろうされているのは自分だけではない。——そうおもふことで、心を軽くすることができると、ひそかに期待していたようだ。無意識のうちに、と言いたいが、奈美はそれを意識していた。

——フィルム、フィルム。……

老人はまた胸をたたいた。

この博物館は、内部を撮影したい人から別に料金を取り、その領収書を衣服のどこかにピンでとめて識別できるようにしていた。老人はそれを胸のポケットの上につけていたのである。別料金といつても、ごく僅わずかにすぎない。

それでも、老人は無念そうに、胸の紙きれをたたきつづけた。

——じゃ、誰かに借りたら？

と、妻が言う。

——そんなに親しくなつた人はいないよ。

——かまわないじゃないの、フィルムぐらい。あたしが借りてあげる。

妻は夫のそばをはなれた。

旅行業者が募ったツアーらしく、グループのなかに老人夫婦が前から懇意にしている人はいないとみえる。

妻は中年の男のところへ行って、なにか言った。男は笑いながらバッグをあけた。彼女の借用の申し入れはうけいれられたのだ。

——ありがとう。あとで返すわね。

彼女のことは、奈美がききとれたのは、その最後のお礼だけだった。

(こんな場合、あたしならどうするかしら?)

目のまえのシーンをみて、奈美はそんなよけいなことを考えた。

たしかによけいなことだった。いま彼女には夫がいらない。かりに将来、このような場面があるとしても、彼女のパートナーはもうあの千葉^{ちば}康夫^{やすお}であるはずはなかった。

千葉なら妻の出る幕もなく、自分でなにもかも、さっさと処理してしまうだろう。ただばやくだけで、からだを動かそうとしない、ひっこみ思案の男を、自分のそばに置いて想像してみることが、奈美には当分できそうもない。

(当分ね。……)

彼女は頭のなかでそうくり返した。結婚生活十年の重みは、やはりすぐにはとり除くことができない。

ひよつとして、自分は千葉康夫と正反対の男性を期待しているのではあるまいか。——奈美はふとそんな気がした。

「いったい、ここへなにしに來たのよ」

彼女はそつと声に出した。妄想もうそつのようなものが、つぎつぎとわきあがつてきそうなので、自分の声でそれをさえぎろうとしたのである。ほかのことを考えよ、と。

夫の千葉康夫は、出張先のロンドンで急死した。急死といつても、それは奈美にとってそうおもわれただけのようだ。出発前に、親しい友人には、からだの不調を訴えていたという。あとからきいた話では、彼は妻には伏せていたのである。

妻でありながら、なぜ夫の体調に気づかなかったのか？

そんな批難のことばは、直接には奈美の耳にはいつてこない。だが、誰かがどこかで言っているだろう。夫の友人や同僚やその細君たち、ほとんど奈美の顔を知らない連中が、そう言っているにちがいない。

うまく夫にだまされた、と奈美はおもう。夫の気づかいたいして、いささか感謝の気持ちのまじったうらめしさといえよう。仕事のうえでトラブルがあつても、体調がすぐれなくても、彼女の夫はそれをけつして口に出したり、表情にのぞかせたりしない性格だったのである。

夫が奈美より九歳も年長だったこともあるだろう。彼女は夫から子供扱いにされたふしもある。

(だが、あれは見破つたわ)

奈美は夫の情事に気づいていて、それを自分の胸にしまいこんでいた。夫は死ぬまでそれを知らなかったはずである。

千葉はロンドンで病床についたときも、

——家内には、しばらくしらせないでほしい。心配しますから。

と、医師に言つたそうだ。

奈美はドクター・アーノルド・スミスから、じかにそうきかされた。

急報をうけてロンドンに飛んだとき、彼女はドクターの家まで行つて、最後のもようをきいたのである。

遺骨を日本に持ち帰り、すべてをすませたあと——正確に半年後、彼女は旅に出ることにした。

彼女には二人の姉がいる。旅の話をしきくと、上の姉は、

——子供がいなから身軽ね。いい氣ばらしになるわ。

と、羨ましそうに言つた。

奈美の旅は、十年前の新婚旅行のコースを、こんどは一人で行こうとするものだった。それをきいて、下の姉は、

——そうね、康夫さんとの思い出をあたためてみるのね。それで、かえつてふつ切れるはずよ。と言つた。

だが、じつはこのイスタンブールは、かつての新婚旅行のコースにははいつていなかった。彼女がこのまちに寄つたのは、ほかに理由があつたのだ。

奈美は五人きょうだいの末っ子である。実家の今川家は、堅実な貿易商で、明治のころから、おもに生葉しょうやくの輸入で専門筋にはよく知られていた。生葉でも儲けたが、学者であつた奈美の祖父にあたる人が、いくつかの特許をもつていて、その収入が安定していたのである。

家業に無関心な奈美は、くわしいことは知らないが、これまで経済的に不自由しなかつたことは、実家に感謝している。

中流意識層がひろがつた現代とちがつて、日本ぜんたいがまだ貧しかったころから、今川家は裕福であつた。だから、奈美の父今川彰造しょうぞうもおつとりと育ち、戦前にはまれであつた外国留学も経験

している。

今川彰造は薬学研究のために留学したというが、あちらでは絵ばかり描いていたそうだ。帰国して家業を継いだあとは、日曜画家に甘んじたが、美術品の収集にも熱心だった。もっともそれについて、奈美の長兄誠造はいつも、

——中途半端なコレクション。

と、けなしていた。

それは美術館を建てるほどの内容でなかったという意味であるらしい。

——どこに狙いをしぼっているか、わからないんだ。体系もないし、焦点らしいものもない。あれやこれやと、気ままに集めたので、芯が通っていない。しょうがないよ。一つ一つは悪くないが、ぜんたいにみると散漫というかんじがする。

美術に一家言をもつ、次兄の純造もそんなふう亡父のコレクションに批判的であつた。だが、奈美は亡父のそんな集め方を、それはそれでよいとおもっている。父に偏執狂的なところが無いのが好ましい。いかにも父らしいという気がする。

自分の心に響いてきたものを、思いつくままに手に入れるのが今川彰造のやり方であつた。奈美は少女のころ、父が買った彫刻の牛をみて、

——パパ、これ、どこがいいの？

と、きいたことがある。父はにこにこ笑いながら、

——縁があつたんだよ。

と、答えた。質問の返事になっていないのに、奈美はそのことばに深い感動をうけた。たしか十歳くらいのときだったが、三十六になつたいまでも、そのシーンと、父のことばの響きを、ありあ

りと思いうかべることができる。

子供心にも、「一目惚^ほれ」といったたぐいの説明を予想していたが、父のことばはそれをほかにこえていた。縁があつたものは、絵画である、工芸品であると、また洋の東西であるとを問わない。気に入ったものが売約済みであつても、それほど惜しいとはおもわなかつたようだ。それは縁がなかつたのである。――

奈美はそれがほんとうに美を愛する、とらわれのない心の構えであると考えている。

（パパは兄貴たちより、人間としてずっとスケールが大きかつたわ。感受性では、もうくらべものにならないほどよ）

末っ子のせいか、彼女はいくらか父親を理想化する傾向があつたようだ。父が好きだつたものは、自分も心を惹^ひかれるような気がする。美意識の面では、きょうだいのなかで、彼女は自分がいちばん父に似ていると思う。

父が残したコレクションは、家族の誰よりも奈美はよく知っているつもりだつた。彼女は結婚したあと、長兄に、

――パパのコレクション、どれかを処分するときはしらせてね。

と、頼んでいた。

――おやじの集めたものを売るほど、おちぶれてはいないよ。

誠造はそう答えたものである。

――あたし、ぜんぶおぼえているわ。

――なんだ、疑っているのか？ そんなに信用できないのかね？

長兄はいささか不機嫌になつた。

——兄さんを疑つてなんかいいわ。あたしにとつて大切なものという意味よ。かといって、自分が欲しいというものでもないわ。ただ兄さんのところにあると、そう考えただけで心が休まるの。

奈美はそう釈明した。

ぜんぶおぼえているというのは、けつして嘘ではなかった。たしかに彼女の父のコレクションは雑多であつたが、その一つ一つが、彼女の心の引き出しに、整理され、分類されていたのである。夫の計報を受け、奈美はすぐにイギリスに飛び、世話になった人たちに挨拶してまわつた。ドクター・スミス邸を訪ねたとき、その応接間で彼女は思わず目をみはつた。

応接間に飾られている二点の中国磁器に見おぼえがあつたのだ。どちらも染付で、一つは壺、一つは皿であつた。ドクターの応接間には、中国磁器はその二点だけしか置かれていない。その二点とも、父のコレクションのなかのものとおなじとは。――

彼女が驚いたのはそれだけではない。

じつは父がのこした百点に近い中国磁器のなかで、奈美が「パパの好みらしくない」と、どうしても首をかしげざるをえないものが二点あつた。ドクター邸の応接間の棚に、クリスタルの時計をはさんで飾られている壺と皿とが、まさにその二点とそっくりだったのである。

はたしてただの偶然なのだろうか？

まずそれを確かめねばならない。

壺の高さは二十センチほどで、それほど大きいとはいえない。皿は直径三十センチ前後で、やはり中型に属するものである。

白磁胎にコバルト顔料によつて絵付をしたものを、日本では「染付」と呼ぶが、中国での名称は

「青花^{せいしか}」である。青い模様のやきものという意味なのだ。「壺^{つぼ}」は日中共通の用語だが、日本で皿
というのは、中国で「盤^{ばん}」と呼ばれる。――奈美にもそのていどの知識はあった。

奈美の父は、しずかなものが好きであり、はげしくうごくものは好まなかった。少女のころ、奈
美は父に連れられて、ある有名な洋画家の展覧会へ行ったことがある。そのとき、父はほとんどの
絵のまえを素通りした。

――なんやしら、こっちのからだまで、ぐにやぐにやになってしまいそうや。

上品な関西弁で父はそう評した。その画家の作風は、画面いっぱい、絵具をのたくるように塗り
つけるものだった。

――あたしもきらい。蛇^{へび}みたい。

彼女もそんな相槌^{あいづち}をうったことをおぼえている。

――渦巻^{うずまき}はかなわん。まきこまれてしまう。

父は肩をすくめた。

べつにあつさりしたものが好きなわけではない。図案化された蓮華^{れんげ}や牡丹^{ぼたん}などが、にぎやかにつ
ながっている、いわゆる宝相華^{ぼそうけ}の染付も多く集められている。

波濤文^{はとうもん}と呼ばれる波をあしらったデザインのうち、魚の鱗^{うろこ}を重ねたような静かなものはあるが、
波頭を立ててうねっているものはない。体系がないと次兄は批判するが、コレクションには、父の
ちゃんとした美意識の芯^こがつかっている。

例外が二点あった。どちらも、うねりくねった波濤文である。波濤文でも竜や魚があらわれる
ものが多いが、その二点は波濤そのものであり、その渦^{うず}のなかから、なにか怪奇なものが生まれよ
うとしている。壺^{つぼ}のほうは渦巻く波のなかに、台風^{台風}の目のように横に長い楕円^{楕円}の空白があり、空白

のなかに車輪のような円があつた。皿のほうは、波のうねりがさらにひどく、縦長の歪んだ楕円の空白がつくられていた。空白といつても、そのなかに歪んだ縦線がいくつも認められる。

なにか事情があつて、手もとに置いたのであろう。——奈美はそう推理した。たとえば誰かが借金のカタに、無理矢理おしつけて、そのままになっているといったような。……

父が自分の好みでないもの、いやそれどころか肩をすくめて嫌つたようなものを、買い入れるわけはない。

（ひよつとすると、おじいさんの時代からあつたものかもしれない）

親から伝わつたものなら、父はけつして人手に渡さないだろう。いくら嫌いであつても、蔵の奥にしまいこむだけにしておくはずだ。

父が他界したいま、どの推理があたっているかはわからないが、今川彰造コレクションのなかでは異質の二点である。

ドクター・スミス邸の二点が、選^よりに選つてそれにそっくりだったから、彼女が目を見はつたのはとうぜんであろう。一瞬、兄が手ばなしたのか、ともおもつた。

遺骨を抱いて帰国したあと、奈美は実家に帰つてたしかめてみた。父のコレクションをおさめた、こぢんまりした収蔵庫には、彼女はフリーパスであつた。

——あつたわ。まちがいなくあつたわ。だけど、そっくりなこともまちがいない。……

彼女はその二点を箱からとり出して棚にならべ、その前に長いあいだ立っていた。

スミス邸の応接間で、彼女は問題の二点のやきものの細部にいたるまで、頭のなかに写し取つた。絵心のある彼女は、そのあとホテルに帰つて、すぐにそれをスケッチしておいたのである。

そのスケッチを取り出してくらべるまでもなく、彼女はスミス邸の二点を、頭のなかに再現する